

日本仏教心理学会 ニュースレター

Vol.19 2019 年 4 月 1日

巻頭語

新会長としての想い 井上 ウィマラ

第10回学術大会より

1. 第10回学術大会タイ会長を終えて 前田 伸子
2. 第10回学術大会を終えて 松永 博子
3. 第10回日本仏教心理学会に参加して 平原 憲道
4. 第10回仏教心理学会に参加して、想うこと 中尾 将大

著書紹介

『「患者中心」で成功する病院大改造 医療の質を向上させる15章』
. 平原 憲道

『仏教文化 — インド・パキスタン・中央アジア —』他
. 早田 啓子

イベント紹介

市民公開講座のお知らせ「発達障害の理解と支援～『生きにくさ』を支える～」
. 紹介 松村 一生

編集後記 千石 真理 ・ 松村 一生

巻頭語

新会長としての思い

健康科学大学 井上 ウィマラ

この巻頭言を書くにあたり、昨年の学会誌に寄稿した「会長就任のあいさつ」を読み返してみながら、人生の不思議を感じています。予定では、今年の3月で高野山大学を退職したら妻の仕事を支えて家の裏方をやろうかと思っていたのですが、去年の夏くらいに知り合いのお医者さんに紹介されて、健康科学大学という富士山麓の大学で大学教員を続けることになりました。もちろん妻や子どもたちのこともありますので、勤務日を調整してもらい家族のためしっかりと時間を使えるようにしました。週半分の単身赴任状態だったのが、毎日家に帰り家族の顔が見られるようになるだけでも嬉しいものです。

出家修行の生活から還俗して一般的な生活スタイルに戻った時、それまでの瞑想修行で得られたことを一般的な家庭生活の中で応用してみるとどうなるのかを探ってみたいと思っていました。今の私にとって、家族は修行道場であると同時に大切な宝物です。そしてその修行の中には、子どもたちとの遊びを通して感性や知性や霊性が自然に育ってゆくような種まきをしてゆくこと、喧嘩や仲直りをしながら思いやりの心を培ってゆくことが含まれています。そして子どもたちが学校に上がるようになるにつれて、学校の先生たちにも、「よりよい授業をしてもらえるようにマインドフルネスを伝えられたらいいなあ…」と思うようになりました。

さて、会長に就任して二年目の目標は、この学会が学術研究団体として認められるように努力してみたいと思います。そのためには研究職の会員が増えてゆくようにもう少し努力する必要があります。学会誌もISSNに登録してもらうようにしたいと思います。また、評議員や運営員の皆様には、今どんな関心を持って研究や探究をされているのか、HPにブログ形式で連載をしていただくかと予定しています。

超大量死時代に足を踏み入れつつある今この日本社会であるからこそ、①死に向かい合うこと、②看取りやグリーフワークを通して生を充実させること、③人間を育む力を社会的に再生させて

ゆくこと、などのテーマに取り組みなければならないと思います。「不死」とも呼ばれる涅槃を目標にして、さまざまな仕方によりよく生きるための努力を積み重ねてきた仏教各宗派の伝統があり、それを支えてきた教理や心理学がありました。昨今のマインドフルネスブームを体験しながら、最新の脳科学を含めて様々な研究が可能になった現代だからこそ、ブッダが体験して伝えようとしたことについて話し易くなってきたことを実感しています。幸せや健康とは何かを問えるようになってきた心理学や科学に仏教の伝統が教えることは少なくないとも感じています。

私は趣味でギターを弾き語りをします。大好きだったお経の歌もいくつかできました。慈悲の歌、般若心経の歌を歌い、パーリ語で幸せについてのお経を唱えるにつけて、仏教と心理学の出会いによってブッダの体験の深さがより身近に感じられる時代がやって来ているのを実感しています。新しいキャンパスとのご縁が、臨床家たちに仏教心理学の真髄を楽しく伝えてゆくための出会いの場になってくれたらいいなあと期待しています。

第 10 回 学 術 大 会 よ り

第 10 回学術大会大会長を終えて

鶴見大学歯学部教授 前田 伸子

日本仏教心理学会 10 周年おめでとうございます。2018 年 12 月 1 日に鶴見大学会館で記念すべき第 10 回学術大会を、曹洞宗大本山の總持寺を母体とした鶴見大学で開催できたこと、そしてご参加して下さった皆様に感謝申し上げます。今までに様々な学会の大会長を務めてまいりましたが、本学会では 1 度だけ学術大会で発表しただけの私が大会長と言う大役を務めることができるのかと言う不安から始まり、慌ただしく当日を迎えましたが、学術大会を振り返ると無事に終わったこと、基調講演とシンポジウムの内容の豊かさと心温まる講演にやり終えた充実感を味わっております。

大会テーマを『医療と宗教の接点、ケアの循環』とし基調講演は、臨済宗建長寺派林香寺住職

であり精神科医でもある川野泰周先生より、まさに医療と宗教が融合したお話を聞くことができました。そして公開シンポジウムでは、真言宗歓楽寺住職であり臨床宗教師である井川裕覚先生からは臨床宗教師のお立場より今まで活動してきた貴重な具体的事例をご講演くださりました。そして鶴見大学歯学部法医歯科学准教授勝村聖子先生からは医療従事者として東日本大震災で犠牲者の身元確認活動に従事した時に体験した事例のお話を伺うことができました。3者の講演は、人の温もりを感じ、それぞれのお立場から人と人との関わりに触れ、心温まる話で聞くものを引き付ける内容で時間があっという間に過ぎてしまいました。仏教系の学部を持たず歯学部と文学部で構成された鶴見大学らしい大会を開催できたと自負しています。個人発表でも、医療と仏教との関係を深めるような発表もみられ、分科会では活発な意見交換がなされたと同っています。今回、懇親会は、鶴見大学食堂の一室を利用しましたが、参加人数とも調和のとれた空間が助けとなり活気あふれる意見交換が行われ、様々な職種の方々に触れることができ本学会は様々な方のお力で大きくなってきのだなと感じました。

最後に本学術大会を開催するに当たり、学術大会実行委員長の松永博子先生、実行委員の鮫島有理先生、渡邊美由紀先生、常世田朋子先生、小笠原重矢里先生、そして実行委員顧問のケネス田中先生のご尽力に深く感謝いたします。

日本仏教心理学会第10回大会実行委員長を終えて

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
自殺総合対策推進センター研究員 松永 博子

記念すべき第10回日本仏教心理学会大会が鶴見大学会館で12月1日(土)に行われました。毎年、寒い大会という印象がありますが、今年の大会は思ったよりも暖かく、晴天に恵まれました。大会の内容につきましては、大会長の前田先生から紹介があると思いますので、私の方は割愛させていただくこととします。

今回の参加者は、ご登壇くださる先生方や実行委員を除いて、基調講演・シンポジウムの参加

が13名、大会全てへの参加が32名でした。多い人数ではありませんが、大会で毎年お目にかかる顔ぶれだけでなく、新しい方が多くいらしたという印象があり、実行委員として嬉しい限りです。

本年度の個人発表は残念ながら4名でした。それぞれの研究発表を興味深く拝聴させていただきました。個人的な意見にとどまりますが、研究発表は全て仕上がって発表するという認識ではなく、研究途上で「今、ここまで進めて、このようにまとめてみたけれども、何かアドバイスは頂けないだろうか」という段階で発表することによって、研究論文の考察が深まったり、違う分野の視点を取り入れたりできるのではないのでしょうか。あまり、難しく考えすぎずに、もっと多くの方からの個人発表があることを願っています。来年度は、是非、皆様方の発表が聞けますように・・・

分科会では、毎年ですが、熱心な議論が行われていました。今年度は、終了時間になっても議論が終わらなかったという分科会もあり、今後の交流が楽しみです。大会終了後、すぐに分科会のメーリングリストが作成され、分科会のメンバー同士のやり取りも始まっています。我々の分科会では、来年度、分科会から個人発表者を出そうと意気込んでいます。これからの交流を楽しみに日々を過ごしてまいりたいと存じます。

最後に、大会長である鶴見大学の前田先生をはじめ鶴見大学の先生方、大会実行委員の皆様方、無事に大会を終えることが出来ましたのも、皆様のお陰です。感謝申し上げます。

来年度の大会は、2019年10月27日（土）上智大学において行われます。いつもより2カ月早くなりますので、どうか皆様のご予定に入れておいていただき、当日ご参加下さいますのを心よりお待ちしております。

日本仏教心理学会第10回大会に参加して

慶応義塾大学 平原 憲道

第10回日本仏教心理学会学術大会は、大会テーマを「医療と宗教の接点～ケアの循環」と定め、横浜市の鶴見大学会館にて2018年12月1日に開催された。

基調講演は「医療と宗教の接点を探る」と題され、臨済宗建長寺派林香寺の住職で精神科医でもある川野泰周師によって分かり易く行なわれた。川野住職は、仏教界においては若手と称される層にいますが、わが国で唯一の「現役の禅僧であり現役の精神科医」という非常に珍しい位置にて活躍している。彼が臨床現場のただ中に見聞する諸々の体験を、仏教教義そして日本仏教の歴史に照らし合わせながら丁寧に解説を進めて行く様は鮮やかであった。

特に、ここ数年は国内でも爆発的な流行を見る「マインドフルネス」の話題にも多くの時間を割いて解説をされた。通常見られるような、マインドフルネス瞑想の効果を、科学的エビデンスを交えて話すというありきたりなものではなく、その点は踏まえつつも、仏教伝統の中で、いかにマインドフルネス（念）が当初から重視されて来たかを順序良く指摘された。仏陀の初転法輪から白隠禅師が「禅病」を治す際に用いた「軟酥(なんそ)の法」まで具体例を紹介し、その中でマインドフルネスとの「共通点」を俯瞰した解説であり、聴衆も大変興味深く聞いていたように思う。私個人の理解も深めることができ、深く感謝したい。

世間でもはやされる「マインドフルネス」は油断すると、その根っことも言える仏教文脈から切り離された形で喧伝され、薄っぺらい「脳トレーニング」や「生産性ツール」のようなものとして語られる弊害がある。ビジネスでの応用といった面ばかりに囚われた歪な形のものも、この数年の間に徐々に目にするようになっていく。そのような傾向に気づきつつ、丁寧に仏教本来の面目を見せてくれた川野住職の講演は大変教育的であった。最後に強調されていた、「マインドフルネスと禅宗での坐禅とは全く同じ根っこ」という言葉を深く味わいたい。

ちなみに、川野住職と協働するチームメンバーには、私（平原）と共通する医療者や僧侶の人脈がダブっており驚いた。伝統が幅を利かせる土壌の中で先進的な芽を育てようとする方々が仏縁により交じり活動の幅を広め、切磋琢磨する姿は大変に心強い。今後の住職の働きがますます楽しみである。

以下に、川野泰周住職のネット上での情報を共有させて頂く：

川野 泰周さん（禅僧・医師）の紹介：

<https://www.axismag.jp/posts/2018/07/96003.html>

川野住職の語るマインドフルネス：

<https://www.keiomcc.com/magazine/report176/>

住職が語る「ココロとカラダの健康塾」でのマインドフルネスの説明：

<https://terakoyagaku.net/id1238/>



基調講演の後は、休憩を挟みシンポジウムが行われた。ここでは、先の川野住職に加え、認定臨床宗教師であり自身は真言宗僧侶でもある井川裕覚住職、そして、鶴見大学歯学部法医学准教授の勝村聖子氏の3名が登壇した。お三方が共にボランティア活動などで密に関係された、2011年3月11日発生の東日本大震災の状況とその後が主なテーマとして設定された。シンポジスト各自が、実際に現場で体験した「医療と宗教との連環」について、縦横に語りが進んだ。

中でも特に私の耳に残ったのは、勝村氏が詳細に報告された、大災害の現場での「死者の身元特定」のための歯科医師の働きである。そのような活動を歯科医師が担うことを私は全く知らなかったもので、本当に驚いた。そして、日常診療の際には「死」など全く遠い存在であった彼ら専門家たちが、「死に向き合うことに対して何も準備が出来ていなかった」まま災害現場で活動したことに対する痛烈な反省そして学びの語りに、強く心を動かされた。

勝村氏は言う。むろん事前に相当の覚悟はあり、用意されたプログラムもあった。だが、現実

はそのような想像をはるかに凌駕した、と。大地震直後の現場では、己れの全存在もまた強烈に揺り動かされ、立ってられなくなる。その、自己としての柱を支えるためには、別の何か、歯科学をはじめとする医学や自然科学とは異なる何かが必要だ。そう、全く異なる視点で世界を見つめる、仏教などの宗教の存在が、必要になるのではなかろうか、と。

これこそ、まさに「ケアの循環」である。表層的には正反対にも見える「医療」と「宗教」という2つの存在が、ぐるぐると連環する妙味である。どちらも「始点」となりまた「終点」にもなるゆえの「循環（サイクル）」に終わりはない。それは永久機関のように回り続けつつ、治療者を被治療者に、救う立場を救われる立場に変えていき、医療と宗教との境目をにじませる。ケアする側が瞬時にケアされる側に立たされる反転。そこではもう、死者と生者との境界すら淡いのかも知れない。



日本仏教心理学会第10回学術大会に参加して、想うこと

大阪大谷大学 中尾 将大

2018年12月に開催された第10回日本仏教心理学会に筆者は発表者として参加させていただきました。個人的には久しぶりの参加でした。評議委員会にも顔を出させていただきましたが、お懐かしい先生との再会をいただいたり、新しいお出合いをいただいたりすることができました。

特にこの原稿を筆者にご依頼くださいました、運営委員の千石真理先生との再会はとてもお懐かしく、嬉しいものでした。何を隠そう筆者は、千石先生には本学会の関西地区勉強会発足当時、大変お世話になり、お導きを頂いておりました。しばらくぶりにお会いしたにもかかわらず、千石先生はまるで最近お会いしたかのように柔和に暖かく接してくださいました。先生の少しも変わらない温顔に接することができ、発表への緊張も自然と氷解しておりました。この場をお借りして感謝を申し上げます。

発表会場に入りますと、心なしか、以前に比べて参加者の数が減ったように感じておりました。また、久しぶりの発表であったせいもあり、どのくらいの先生方に筆者の発表に対して興味を持っていただけるか半ば不安を抱きながら、登壇いたしました。拙い発表内容であったにもかかわらず、様々なご意見やご質問をいただくことができ、筆者にとりましては学びの多い、大変有意義な発表とさせていただくことができました。学会がスタートした初期といささかも変わらない、仏教や心理学に対する熱い研究熱を体感させていただいたように思います。ありがとうございます。

また、筆者の発表のメインテーマは「瞑想」と「さとり体験」というものでしたが、学会の午前中に筆者のテーマと関連する、「マインドフルネス」に関する議論が活発に行われていた事も筆者の発表については追い風になっていたように思いました。このような背景を個人的に鑑みますと、我が国において、ストレスなど精神的な苦痛が問題になっていることが大きいのではないかと思います。日々の日暮しの中で、誰もが将来への不安、人間関係に端を発する苦痛、過去の後悔など感じておられることでしょう。なかなかそのような悩みや苦しみを他者に相談できない方も多くいらっしゃるのではないかと推察いたします。

マインドフルネスはそんな苦しみから自らを解放し、意識を「いま・ここ」に集中して、生を実感し、生を味わう営みではないかと思います。日常の何気ないことにも目を向けて、いま、この「生」を、一瞬一瞬の「生」を生ききり、味わうことだと思います。発表でも述べさせていただきましたが、日常生活の中で実践できる瞑想があります。それは「歩く瞑想」や「食べる瞑想」

です。歩くことも食べることも日常生活の中で特に意識することなく、行われている営みでありましょう。しかし、意識を傾けて実践してみると、これまでとは全く違う世界を発見することができます。例えば、歩く瞑想の場合、駅までの道すがら、ゆっくりと歩きながら感じる、頬を撫でる風の心地よさ、道端に咲いている花の美しさ、登校する小学生の可愛らしい元気な声など、普段では気付くことのない生の素晴らしさに気づくことだと思います。ただひたすらに電車の発車時間ばかりを気にして、しゃにむに最寄り駅を目指してせかせかと歩いていたら、感じることも見ることもできない世界でしょう。これらの体験が直ちに各人が抱えている現実的な問題を解決することに直結することは、ほぼないと思います。しかし、今、自分が抱えている問題に対する捉え方や構え方が変わるように思います。そのような視点の転換がやがて、現実の好転や悩みの解決へとつながっていくように筆者は思うのです。(筆者の経験ですが、悩みそのものが実は思っていたほどたいしたことがないように思えてきたり、悩むこと自体に意味がないように思えたりして、自然と悩みが解決したようなことがございました)

仏教の開祖 ゴータマ・ブッダは生・老・病・死の問題に対して、これらの問題は避けて通ることはできないが、捉え方を変えることで解決することができるかと語っておられます。マインドフルネスはまさにブッダの提唱された解決策を実現することができるツールではないでしょうか。

ブッダは以下のように述べています。

「自己の救済者は自分自身である。他の誰が救ってくれようか。自分を正しく制御してはじめて、人は得難い救済者を手に入れるのだ」 ダンマパダ

価値観が多様化し、社会の変化が以前と比べて恐ろしくスピートアップしている現代社会において、我々は何を頼りに生きてゆくべきでしょうか。様々な事柄に振り回されないためにもまずは自分の足元をしっかりとさせる必要があると思います。ブッダは遠い、2500年前の時空の彼方から、我々に自ら目覚めるよう、静かに呼びかけられているように思います。

2019年第11回大会は東京の上智大学で開催されると聞き及びました。個人的には次回の大会

で、マインドフルネスや瞑想がテーマとして取り上げられることを期待しています。まさにそれが、時代のニーズにあっていると思われるからです。次回も多くの先生方が参加され、熱い議論がなされることを祈念しつつ、筆を置きたいと思います。

第10 仏教心理学会学術大会に参加して

追手門学院大学大学院心理学専攻
心理学研究科博士前期2年 吉田 晋

今回初めて大会に参加させて頂きました、追手門学院大学大学院博士前期2年の吉田晋と申します。今回のニュースレターの記事執筆ですが、若輩ではありますが務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

現在、私は臨床心理士を志して勉強中の身なのですが、あるご縁から仏教に触れる機会がございまして、臨床心理学と仏教を学びながら、日々を過ごしております。ただ、なかなか本を読むだけでは、その二つをどのように臨床に活かしていくかというところで、どうしても手詰まり感がありました。しかし、今回の大会で皆さまのご発表をお聞きしまして、自らの臨床をひとつ前に進めることができたと感じるところがあり、大変ありがたく思っております。井川裕覚先生のシンポジウムで語られました、日本人の先祖感と、故人のケア・つながり直しを関連させたお話は大変興味深く感じました。また、発表後のお昼休みに、井川先生にお時間を頂き、改めてご説明して下さりまして、本当に感謝しております。

また、その後にございました分科会ですが、私はカウンセリング・心理療法の会に参加させて頂きました。今回は瞑想の会と合同だったこともありまして、僧侶の方、臨床心理士の方、さらには高校生の方もいらっしゃいまして、色々な視点を通したディスカッションをすることができました。近年はYoutube やニコニコ動画を通してマインドフルネスをやってみようという方もいるようで、化学の進歩によって仏教に触れる機会が多くなっていることは嬉しく感じます。またプレイセラピーに関するところで、良寛禅師の毬付きの話となりました。私自身、お恥ずかしながら良寛禅師につきましては、お名前は聞くものの、どういった方だったのかはあまり詳しくは

存じ上げませんでした。帰宅後、さっそく大学の図書館で調べましたところ、「慈悲の心を持ち子供たちと唯楽しんで遊ぶ」ということをされた方、という印象を持ちました。知識を得て研鑽を積み上げていくことも確かに大切ではありますが、そこに縛られることなく、ただ楽しむ、ただ遊ぶということが出来ることで、クライアントとセラピストの双方にとって、より良い経験ができるのだろうと、初心に帰って様な心持になりました。

最後になりますが、仏教と心理という本当に興味の尽きない分野に身を置いているなど改めて感じております。今回の大会で学んだことを活力にして、また歩んでいきたいと思っております。改めてこの場を借りて御礼申し上げます。スタッフの皆さま、参加者の皆さま、本当にありがとうございました。



著書紹介

「患者中心」で成功する病院大改造

医療の質を向上させる 15 章

原書編集: Susan B. Frampton / Patrick A. Charmel

訳: 平原 憲道 / 和田 ちひろ

- 判型 A5
- 頁 368
- 発行 2016年06月
- 定価 4,104円 (本体 3,800円 + 税 8%)
- 医学書院 ISBN978-4-260-01242-3



患者中心の医療のモデルとして知られている米国「プレイント

ゥリーモデル」の考え方と、導入した医療施設の概要をまとめたものが本書である。患者中心の医療に求められる要素とは何か、医療の質を向上させるためのケアはどういったものなのかを、実践も含めて解説する。さらには、病院経営の視点からみた「患者中心の医療」、医療者と患者の関係、医療の質と安全性等にも言及している。患者のための病院づくりに応用可能な事例を豊富に掲載することも本書の特徴である。

本書の编者である米国 NPO 団体プレイントゥリーのスーザン・フランプトン代表と私（平原）の出会いは 2000 年、日差しがまぶしい春の鎌倉であった。フランプトン氏は、共訳者の和田ちひろ氏が主催するシンポジウムに登壇することになっていた。聖路加看護大学の講堂で行われたシンポジウムでは、「患者中心の医療」の先駆的取り組みが紹介され、そのとき、私は通訳を担当した。ここから縁が始まる。

私がプレイントゥリー本部とその基幹病院であるグリフィン病院を訪れたのは 2003 年のことであった。フランプトン氏や病院幹部と一緒に院内を巡りながら、私はこの急性期病院が予想以上に静かなことに拍子抜けした。「患者様のために！」と燃えるスタッフが走り回りながら働いているだろうという私の予想は見事に裏切られた。スタッフは開放的なナースステーション、ラウ

ンジ、ヘルスケア・リソースセンターなどで、患者・家族と穏やかに会話していた。

その理由はすぐに分かった。院内では誰も「無理」をしていなかったのだ。本書で繰り返し書かれている通り、ここでは「患者中心の医療」が、少数の頑張る個人が院内の抵抗を押し切って突き進む類のものではなく、「病院全体のシステム」としてしっかりと組み込まれていた。院内デザインや部屋の配置、スタッフの労働環境や福利厚生、業務内容や人材教育に至るまで、すべてのシステムが1から10まで患者中心であるがために、誰も無理する必要がないのである。

彼らが誇るその「システム」をできるだけ一般化・マニュアル化したものが本書である。医療に携わる方々、特に、病院経営の現場に近い場所で働く向きには、ぜひお目通し頂ければと思う。

著書紹介

昭和女子大学 早田 啓子

本学会の事務局より、学会誌のニュースレターの著書紹介のコーナーに拙著の著作について紹介するというお話をいただいたので、最新版から順に遡って書かせていただくことにする。

『仏教文化－インド・パキスタン・中央アジア－』

昭和女子大学研究助成 2017年2月 Book Way

本書は仏教文化を切り口に、インドからパキスタンを経て中央アジアに至る地域の現地踏査と史料によって、インドで生まれた仏教が当地の文化とどのように融合しながら伝播していったのかを論じた著作である。この本が成るまでに幾多のフィールドワークを入れると20年以上を要している。この本が出版される以前の2000年にはアメリカで同時多発テロ事件が起こり、そしてこれは混迷する新世紀の幕開けとなった。私はこの本の「はじめに」で、「本来、文化とは何であったのか。それは人間にとってこの自然を生き抜くための創造的営みであったはずである。

人間の叡智を今ほど問われている時はない。」とこのような時代に仏教文化研究をする意義を明

確にし、今一度研究の原点に立ち返り自分の立場を確認したいと考えた。本文はインド・パキスタン・中央アジアの各三章に分かれ、補遺として西北インドのジャータカと仏伝説話について述べた。

第一章「インドの仏教文化」では、サンチーとパールフットの仏塔の彫刻を取り上げて、本生図と仏伝図について詳解し、原始仏教美術には仏像不表現の原則が貫かれていたことを指摘した。

第二章「パキスタンの仏教文化」では、ガンダーラ美術の源流が漢書、後漢書等の漢籍資料を駆使しながらクシャーン美術がギリシャの影響を受けたことを述べた。さらにタキシラの仏教寺院についても言及した。第三章の「中央アジアの仏教文化」では、この地が多く宗教の坩堝であったことやアムダリアの過渡地であったテルメズに散在するカラ・テパ遺跡やファヤズ・テパ遺跡をはじめとする多くの仏教遺跡について述べた。補遺のジャータカについては、これらが東南アジアにも多く存在するテーマであるから研究は途上であるとした。

“IPPEN” — The Japanese Buddhist 'Sage Who Abandoned All' —

日本学術振興会 科学研究費 2015年 Book Way

本書は鎌倉時代末期の遊行聖一遍の生涯とその浄土思想について述べた著作である。日本浄土教は法然に始まり親鸞を経るが、その思想はすんなりと一遍に帰結してはいない。浄土思想を日本という国に定着させるために、一遍は日本の自然と結びついた神的な概念を考えた。本書は、日本浄土教の着地点を日本の自然に求めたという意味で、広く世界の研究者に日本浄土教の内実と日本文化の本質を問うた著書である。

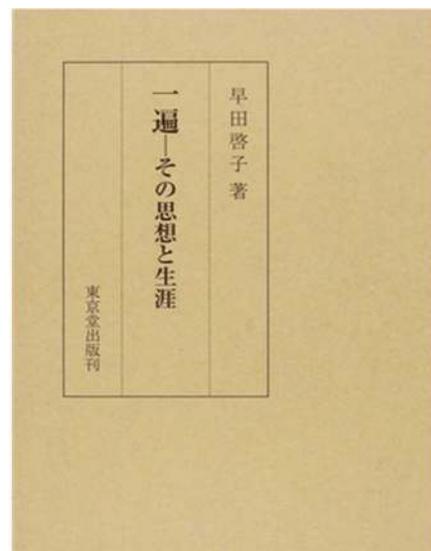
『一遍—その思想と生涯—』

昭和女子大学研究助成 2013年2月 東京堂出版

“IPPEN” —The Japanese Buddhist 'Sage Who Abandoned All' —の底本となった著作である。

“THERAVADA BUDDHIST STUDIES IN JAPAN” (ATISHA MEMORIAL PUBLISHING SOCIETY 1998年 Calcutta)

筆者の博士論文で、インドで出版した著作である。日本の仏教研究者が過去一世紀に上座仏教の研究に如何に大きく寄与してきたか、またその研究抜きで仏教研究は完結しないことを述べた著作である。



以上は単著について述べたが、その他共著には『世界宗教建築事典』(2001年 東京堂出版)、『仏教思想とその展開』(平成4年10月 山喜房仏書林)がある。

イベント紹介

シニア産業カウンセラー 松村 一生

私が、関わっております一般社団法人 日本産業カウンセラー協会の全研究大会が、6月に神奈川県で開催されます。本日は、その中でも一般の方に無料で開放されるイベントについて、ご紹介させていただきます。

市民公開講座 (参加無料)

(2019 産業カウンセリング第48回全国研究大会 in 神奈川：第2分科会)

「発達障害の理解と支援」～『生きにくさ』を支える～

日時：2019年6月9日(日) 9:30～14:50

場所：TKPガーデンシティ PREMIUM（横浜ランドマークタワー25階）

第2分科会では、成長に沿った移行期の連携の在り方という視点で、協会の支援経験から得た知見を各年代毎に発表します。市民の皆様と共に「困っている人の生きにくさ」支援のヒントを共有できれば幸いです。

第2分科会コーディネーター 井潤 知美（いたに ともみ）

大正大学心理社会学部臨床心理学科准教授

近著「困っている子の育ちを支えるヒント：発達のもろ性を知ることみえてくる世界」

2018年9月ミネルヴァ書房

お申込み方法（定員になり受付終了します）

以下の3項目をメールでお送り下さい。

1. お名前 2. 職業（会社名） 3. メールアドレス

市民公開講座受付メールアドレス：2019kanagawa-koukai@counselor-k.jp

連名でのお申込は3名様まで可能ですが、上記3項目はおひとり様毎にお書き下さい。

受付完了後、各メールアドレス宛に受付番号を返信致します。

当日の入場方法（受付9:00～9:30）

第48回全国研究大会「第2分科会・市民講座」受付で、お名前と受付番号をご提示ください。

「参加証」をお渡しします。

尚、昼休憩は、11:30～12:40を予定しています。

編集後記

元号が平成から令和に移ります。新元号に関しては、色々なご意見があり、私は主に西暦を使います。しかしながら、令和を使用する際には、令=0、無、悟りと考えようかと思えます。

混沌とした不安の多い世界情勢ですが、全人類、生物が平和に共存できるように仏教徒として、自分なりの努力をしていきたい。私たちは皆、宇宙船地球号の乗組員なのですから。

千石 真理 (心身めざめ内観センター)

4月は、仏教徒にとっては「はなまつり」の季節です。釈尊の誕生日である灌仏会を、この季節を彩る花に因んで「はなまつり」と呼ぶようになったのは、いつの頃からなのでしょう？

甘茶をかけて祝う誕生仏の姿と、桜の花びら舞う中を歩いていく幼稚園児や、小学校低学年のかわいらしいさまを重ね合わせて見ている自分がいます。

これから彼らの歩んでいく先が、明るく、希望に満ち溢れた道でありますように。

松村 一生(シニア産業カウンセラー)

